

令和7年度 上田市立東小学校 学校自己評価シート

学校目標		めざす子ども像	
よく気づき よく考え よく働き 進んで学ぶ子ども	1 自分の言葉で語り 聴き合い 自ら行動できる子ども【自己表現力】		
	2 自他のよさを認め ふれ合って 協働的に学ぶ子ども【社会参画力】		
	3 向上心をもって ねばり強く 最後までやり抜く子ども【課題探究力】		
今年度の重点目標(重点活動)			
「子どもたちが 主人公の 幸せな学校」	主体性の追究	○授業改善～子ども主役の授業へ～ ○子どもたちが自分で計画実行する学習 ○子どもに合わせた多様な学習スタイル	
	多様性に向き合う	○多様性を包み込む教育の推進 ○相手を受け止め 折り合いをつける力 ○「対話」と協働」と「笑顔」で多様性に体操	
	つながる 広がる学校	○「挨拶」「懇談」「情報発信」で輪を広げる ○地域・保護者との横のつながりを広げる ○一中区学校園との縦のつながりを深める	

総合評価						
1 概ね達成 「導入の工夫」「見通しをもった学習」「まとめを自分の言葉で書く」など、自分の考えを言語化する機会が増えている。 2 概ね達成 授業で「相談」「話し合い」「相互支援」の場を設け、協働的に学ぶと共に、他者を認め合う気持ちや行動が芽生えてきている。 3 概ね達成 継続的な努力を支える取組により、粘り強く取り組む姿勢が見られると共に、教師自身が授業改善・職務改善に挑戦している。						
成果と課題				A	B	C D
○教師一人ひとりの授業改善や子ども理解の深化、地域・家庭との連携が進み、チームとして子どもに寄り添う学校運営が定着してきた。 ○学習の見通しをもった授業や、互いを認め合う取組を通して、子どもの意欲・思いやり・主体性が育ってきている。 ☆子どもの問いを生かす問題設定や学びの振り返りの深化、活動の目的意識の明確化など、更なる質の向上が求められる。 ☆個別支援の充実や挑戦を共有する文化づくり、取組の継続性など、全校的な体制強化と発展的な学校運営が今後の課題である。					○	
					○	
					○	
						子どもが自ら問い、考え、成長を実感できる授業づくりを軸に、学びの過程を見つめ直し、支え合い・認め合う文化を学校全体で広げていく。 教職員一人ひとりの挑戦をチームの力へつなげ、地域・家庭とも協働しながら、「子どもも教師も前向きに挑戦し続ける学校」を目指す。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育活動	主体性の追究	授業改善～子ども主役の授業～	・子どもの願いや問題意識を元に学習問題を設定し、子どもが自ら学ぼうとする導入場面を設定していたか。
		子どもたちが自分で計画実行する学習	・自分なりの方法で問題解決の見通しをもつ場面と、本時の学習のよさをメタ認知する場面を設定したか。
		子どもたちに合わせた多様な学習スタイル	・一人で学ぶ、友とともに学ぶなど、自分に合った学び方が保証される場面を設定したか。
	多様性に向き合う	よさやちがいを受け入れ 認め合う	・友のよさに気付いたり、その人らしさを受け入れる態度が育まれるような授業や学級経営を行ったか。
		「懂れや思いやり」が生まれ「笑顔のバトン」をつなぐ交流活動	・学年や学級の枠を越えて、つながり合う異学年交流活動の機会を設けているか。
		一人ひとりが輝き活動できる場づくり	・目標をもち、継続的に取り組んだり、新たに挑戦したりして、自らの成長に気づき、自信につなげることができるような取組ができたか。
学校運営	つながる広がる学校	あいさつと返事で人と人の心をつなげる	・子どもたちが相手に気持ちが伝わるあいさつのよさに気が付くように、教師自らが気持ちのよいあいさつを実践したか。
		地域学習とキャリア教育で地域とつなげる	・地域の素材を教材化し、授業実践したか。
		共に学校を拓き信頼関係をつなげる	・学校での子どもたちの学びの様子を保護者や地域に発信することができたか
	教職員の姿勢	教職員集団を学びと成長へとつなげる	・新しい発想で、前向きに、一歩でも前進しようと挑戦を試みたか。
		あらゆる垣根を越えてチームによる支援体制へとつなげる	・学級や学年の枠を超え、多角的な視点で児童理解を深め、よさや可能性を引き出すようにしているか。

成果と課題				A	B	C D
○子どもの実態や興味・関心を踏まえた導入ができるようになってきた。 ○前時の復習を導入に取り入れるなど、学習のつながりを意識した構成ができた。 ☆限られた時間で子どもの願いや問いをとらえることに難しさを感じる。					○	
○単元の最初にゴールを示し、見通しをもって学習に取り組んだ。 ○学習のまとめを自分の言葉で書き、学びを整理する力を育成した。 ☆学習過程や自己の成長をメタ認知し「どのように学んだか」「なぜできたか」を意識する機会が乏しい。					○	
○「席を自由に動いて話し合う場面」「相談タイム」など、子ども同士の相互支援が生まれる仕組みを設けた。 ☆目的が明確でないまま、形だけの話し合いや活動になることがある。 ☆思考の焦点化や振り返りが不十分だった。					○	
○「いいところ探し」を行い、クラス全体で肯定的な人間関係を築けている。教師も望ましい姿を全体に紹介し肯定的に関わった。 ☆「いいところ探し」が日常化する一方で、活動がマンネリ化し、言葉が表面的になる傾向がある。					○	
○計画的な異学年交流において上級生としての責任感や思いやりの気持ちが育ち、「寄り添う」「教える」「支える」という行動が見られた。 ☆交流が特定の時間・機会に限られ、日常的・継続的な関わりが少ない。自発的な関わりへの創出が課題。					○	
○週1回の漢字テストや「がんばりカード」等の仕組みを設けたことで、継続・成長を実感し、学習に対する前向きな姿勢が見られた。 ☆主体的に取り組めず成長実感をもてない子どもへの支援や、達成感を味わえるような工夫が求められる。					○	
○教師がモデルとして行動している。「全員でそろえる」「気持ちよさを感じる場」など、雰囲気づくりへの工夫も見られる。 ☆教師からの声かけに対して返す子どもは増えたが、主体的な行動としてのあいさつが定着していない。					○	
○「川」「地層」「遺跡」「商店街」「JAとの連携」「ちょうさたい」「カモンひがしっ子タイム」等、地域の自然・歴史・人材を活かして教材化した。 ☆地域との関わりが“体験”にとどまり、“学びへの発展”に結びつけられていない。学級によって差がある。						○
○各お便利について「毎週出すことができた」「なるべく出すようにした」等と、発行への意識を高めた。また、電話での共通理解を重視した。 ☆発行頻度にばらつきがある。学習や行事との両立を図る中で、計画的な発信の仕組みづくりが求められる。					○	
○「授業改善に励んだ」「職務の改善を提案した」など自ら課題を見つけ、よりよい方向を模索する主体的な姿勢が見られた。 ☆個人の挑戦を学校全体や学年チームの挑戦へと広げ、挑戦が応援される雰囲気をつくるのが次のステップ。					○	
○職員間で日常的に子どもの様子を共有、チームとして支援・指導にあたることができた。単一の視点に偏らない理解が進んでいる。 ☆他学年の子どもについて、話を聞く機会は増えたが、実際に関わる機会はまだ限定的。自ら関わる機会を意識的に増やすことが課題。						○
						・子どもの問いや発想を生かした導入を意識する。 ・限られた時間の中でも子どもの声を生かすことができるよう、簡潔で柔軟な導入の工夫を進める。
						・振り返りを「形」ではなく「気付き」につなげる工夫(ペアでの対話的振り返りや板書による学びの過程の可視化など)をし、メタ認知的な学びを促進する。
						一人で考えた内容を共有し、仲間との対話で考えを深める明確な流れを意識したする(「個別最適」と「協働」をつなぐ授業構成)。 ・子どもが安心して主体的に動けるように目的と手順を明確化する。(話し合い活動での、めあて・役割・評価 等)
						・「相手を認める」だけでなく、その人の立場で考え、「なぜその行動がよかったのか」、「自分にどう生かせるか」といった共感的理解を育てる。
						・朝の会・掃除・読書・遊びなど、日常の中に自然に異学年と関われる活動を組み込む。 ・交流を通して「何を学ぶか」「どんな成長を目指すか」を明確にし、活動後に感じたことを共有する時間を設ける。
						・定期的に「できたこと・工夫したこと・次に挑戦したいこと」を書く機会をつくり、成長を可視化する。 ・「がんばる内容」「期間」「成果の見え方」を子どもと共有し、目標を小さく分けて段階的に達成できるようにする。
						・あいさつを通して人とのつながりを感じる指導(あいさつ気持ちの交換会など)感想を共有する場を設ける。 ・返答がない子どもには無理に求めず、関係性を深めながら自然なやり取り(会釈、手を振るなど)を重ねていく。
						・生活科や総合的な学習の時間で地域課題に結びつけ、探究的に学ぶ機会を作る。 ・見学や体験後に「気付いたこと・もっと知りたいこと」を子どもが整理する時間を設ける。
						・「月○回」など目標を設定して発行計画を立てる。短い内容でも続けることを優先し、無理のない運用を心がける。 ・懇談会や参観後に通信でフォローしたり、学期のまとめで保護者の声を紹介したりすることで、継続的な対話を促す。
						・業務を整理し、挑戦の時間・協働の場を意識的に確保する。 ・成功・失敗を含めて記録し、共有して「次の挑戦」につなげる。 ・教師自身が挑戦する姿を見せ、子どもも新しいことに前向きに取り組める学校風土を育む。
						・他学年の活動への参加、異学年交流授業、合同行事などを通じて、実際に子どもと関わる機会を増やす。 ・子どもの努力や成長を共有し合う場(児童集会や職員会での共有など)を設ける。

※評価基準 A…達成できた B…おおむね達成できた C…やや達成できなかった D…達成できなかった